

初期ハイデガー哲学における存在論の生成

渡部, 明

<https://doi.org/10.15017/2328457>

出版情報 : 哲學年報. 54, pp.87-103, 1995-03-20. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

初期ハイデガー哲学における存在論の生成

渡部 明

序

本稿は初期ハイデガー哲学における存在論の生成の内実を考察することを課題とする。^①なぜなら、ハイデガーが生涯、存在への問いを問い続けたことを否定する人は誰もいないだろうが、彼の哲学の出発点における存在論としての哲学の確立の意味を問うことは余りなされていないように思われるからである。確かに、ハイデガーの存在論成立の一般的解釈傾向として、一九二一年が存在論化の時期とされている。例えば、「氣遣うことというカテゴリーによる事実性の存在論化(Ontologisierung)」^②とか「生の哲学から現象学的存在論への移行」^③あるいは「生から現存在へ」^④といったスローガンが解釈者によって掲げられている。しかし、その内実は依然として不明なままである。ハイデガーはヤスパース宛の書簡で「古い存在論(及びそれから生じたカテゴリー構造)は根本から新たに形成し直さなければなりません。」(1922.6.27)と語っている。^⑤このことが本質的に意味することは一体何なのだろうか。このことを問うことが要求されている。

ハイデガーの『存在と時間』(一九二七年)への歩みを考察するとき一九二一年は決定的に重要な年である。この意味で我々は他の解釈者と一致する。なぜなら本来の意味でハイデガーの存在論が成立した時期と考えられるから

である。しかし、それはアリストテレス『形而上学』を背景にして初めて語りうることであると考えられる。即ち、アリストテレスの意味での存在論としての哲学への視向なしに初期ハイデガー哲学を理解することはできないのである。我々は一九二一年をハイデガー哲学のアリストテレス『形而上学』導入による存在論化の時期と考え、このことを主として一九二一／二二年冬学期講義『アリストテレスへの現象学的解釈―現象学的研究入門―』を軸に論定したい。

叙述は以下のとおりである。

存在への問いが『ヤスパース『世界観の心理学』に寄せる評論』で成立していることの自明性を論じ(I)、アリストテレス導入の外面的証拠を挙げる(II)。そして、一九一九年戦争緊急学期とされるハイデガー哲学の出発点がフッサールの根源学の枠組みの中で位置づけられることを示し、一九一九年以降のハイデガーの根源学の理念をそのもとで理解する(III)。その根源学の理念の上にアリストテレスの『形而上学』が導入されることによって、存在論として根源学が強化され、存在論としての哲学が成立することを論定する(IV)。(IV)ではアルケー論としての、存在者としての存在者への問いを一九二一／二二年冬学期講義の哲学の定式の内に見て、それをアリストテレスの『形而上学』の定式の取り返しと解釈する。即ち(III)から(IV)への移行は一九二一年のアリストテレス導入が決定的に重要であるということが大きな論点である。つまり、フッサールからアリストテレスへの移行が存在論生成の決定的なポイントなのである。そして、存在論と事実的生の解釈学との関係について、何故根源学が実際は生分析になるのかを示したい(V)。

I、〈私が存在する〉の意味への問いとしてのヤスパース評論

主著『存在と時間』への歩みに関しては、近年講義録の刊行によって、その思想の熟成の過程がかなり明らかになってきたと思われる。とはいえ、我々が主題にしたい一九二一年当時の資料は余り十分とはいえない。唯一の公刊論

文は存在への問いの思惟の歩みを全体として綴った『道標』(Wegmarken)の中の『ヤスパーズ『世界観の心理学』に寄せる評論』(一九一九/二一年)であろう。それ故、さしあたりまずこの評論における存在への問いを見てみよう。このヤスパーズ評論が『道標』の第一論文であることはハイデガーの思惟の出発点を語る上で重要なことであると思われる。この論文での主要な論点は「私が存在する」の意味への根本的な問い」(GA9,5)である。「私が存在する」(ich bin)への問いにおいて強調されているのはDaseinという存在の問題であるということには注目すべきである。生への問いではなく存在への問いがヤスパーズ評論を支配しているのである。ハイデガーは実存の問題を「事実的な遂行歴史的な生は・・・事実的な(私が存在する)の意味に根源的に属している。」(GA9,35)と捉える。一九二一年のレーヴィット宛の書簡でも「私は自分の(私が存在する)から、私の精神的な、そもそも事実的な由来から仕事をしている。この事実性でもって実存することは猛威を振るう。」⁽⁶⁾と語っている。ヤスパーズが生が何であるかを考察するのに対して、ハイデガーは「一体(生)はいかに現にあるのか」(Wie ist denn das (Leben) da?) (GA9,38)と問う。「私が存在する」という事実性の意味が彼の中心課題であり、事実的生の解釈学の問題圏の内では生への問いが存在(Dasein)への問いへと移行することをヤスパーズ評論は示している。一九二一年に存在への問いが成立していることは、まずヤスパーズ評論において認めうるだろう。

II、アリストテレス導入の外面的証拠

さて、では一九二一年にハイデガーが存在論への自覚的定位置をなしたと何故言えるのかを考えてみななければならない。まず、外面的に見てみよう。一九二一年六月にこのヤスパーズ評論の原稿をハイデガーはヤスパーズ自身に送っているが、その時に書簡に次のように書いている。「文体はドイツ的というよりもギリシア的です。なぜなら、私は加筆訂正の時に、そして今もほとんどもっぱらギリシア語のものを読んでいます。」⁽⁷⁾これは先のヤスパーズ評

論のことを示して、この時期のギリシア哲学への彼の集中を表わしていることは自明だろう。さらに、「冬には私はアリストテレスの形而上学について講義するつもりです。」⁽⁸⁾とも書いてある。(1921.6.28) これは後で問題にする一九二二/二三年冬学期講義のことを指している。この書簡を引用したのは、一九二二年の独自性として、ギリシア存在論、とりわけアリストテレス『形而上学』の導入が決定的であったということをさしあたり言いたかったからである。このような外面的証拠として、さらに幾つか挙げてみよう。まず、キシールの報告によれば、ハイデガーはレーヴィット宛書簡(1921.8.8)において、講義ではパウロ・アウグスティヌスからアリストテレスへと主題の移行をなしつつあると言っている。⁽⁹⁾ 実際、一九二二年夏学期の『デ・アニマ』演習から一九二四年にかけて集中的にアリストテレスが講義、演習で取り扱われる。⁽¹⁰⁾ しかも、キシールによれば、一九二一年の演習では『形而上学』第七巻のウーシア論が扱われていることが報告されている。⁽¹¹⁾ また、クツシュの報告によれば、ベッカーへの書簡(1920.5.11)において、ハイデガーは「アリストテレス形而上学はおそらく今日の形而上学よりも先んじている。」と高い評価をなしている。⁽¹²⁾ これらのことは決して偶然ではないと思われる。さしあたり、外面的な証拠に過ぎないが、一九二一年にアリストテレスが、とりわけ『形而上学』がハイデガーの思惟の背景として浮かんでくる。

Ⅲ、一九二一年以前の動向―生の根源学―

しかし、本当に一九二一年がターニングポイントと言えるのだろうか。このことを確認するために、それ以前のハイデガー哲学の論点を簡単に追っておく必要があるだろう。ハイデガー哲学の事実的な出発点が一九一九年の戦争緊急学期講義にあることは一応認められよう。そして通常、初期フライブルク時代のハイデガー哲学は事実的生の解釈学の時期として一貫して理解されることが多いと思われる。ここでの解釈学とは解体として、形而上学によって隠蔽された生経験を解放するとされるものである。実際、初期フライブルク講義においては一貫して事実的な生経験が主

題であり続け、一九二〇／二一年冬学期講義『宗教現象学入門』の冒頭では「哲学の出発と目標は事実的な生経験である」と宣言したと言われている。⁽¹³⁾ もちろん、我々も原始キリスト教に原形をもつ事実的生経験を無視することはできない。例えば、ここからハイデガーは生経験の歴史性や遂行の優位を取り出し、生の根本動性を獲得している。⁽¹⁴⁾ ここでは、形而上学の根本前提を問い返すことによつて初めて事実的生の解釈学が問われうる地平が開けるという意味で、アリストテレスが批判的に解釈されるべく登場すると考えられよう。

さらに、初期フライブルク時代に一貫して重要であり続けた事象として根源学の理念がある。出発点である一九一九年戦争緊急学期講義において「根源学としての哲学の理念」(GA56/57.15.22) が語られ、現象学が前理論的な根源学とされ、歴史的生に優位がおかれている。このことはフッサール現象学との対決として、ペゲラーも指摘するよう(15)に、超越論的自我のかわりに事実性 (Tatsächlichkeit) における歴史的生をハイデガーが対置したと理解できる。そして、一九一九／二〇年冬学期講義では、生それ自身の根源学としての現象学を語っている。「現象学の理念は生の根源学である。」(GA58.80) さらに「根源現象としての生」(GA59.18) を語る一九二〇年夏学期講義では「事実的生経験は全き根源的な意味において哲学の問題構制に属している。」(GA59.38) とも言われている。明らかに、これらは連続性をもっている。このように原理に関わる根源学がはじめからハイデガーの視野の内に収められているとすれば、ことさら一九二一年という時期にこだわる必要はなく、事実的生の解釈学ということで初期ハイデガー哲学を一貫して理解してよいではないかということになる。つまり、根源学の対象である生への問いこそが問われるべきであると言えそうである。なぜなら、一九二一年以降も同じく生を扱っていることには何ら変わりはないのだから。さて、現象学としての根源学はさしあたりフッサールで押さえることができる。ここで現象学について少し触れておこう。この時期にはフッサールの枠組みがハイデガーにとって支配的であったと思われる。フッサールの現象学は根源学として位置づけられるが、これはハイデガーの現象学が生の根源学であるのと対比をなす。そもそも、ハイデ

ガーはフッサールの根源学の枠組みにのつている。フッサールは学的哲学としての現象学について『厳密な学としての哲学』（一九一一年）で次のように言っている。「哲学というものはその本質から言えば、真の始原の学であり、根源の学であり、万物の根元（リゾーマタ・パントーン）の学である。」⁽¹⁶⁾このいわゆる『ロゴス』論文は当時支配的潮流であつた自然主義の哲学と歴史主義および世界観の哲学を批判して、これに厳密な学としての現象学的哲学を対置した。哲学が厳密な学として成立するためには純粹現象学の領域が開示されねばならない。一九一九年のハイデガーの根源学の理念においても哲学と世界観の非両立性が語られ（vgl. GAS6/57, 11ff.）、精神についての経験科学は根源学でないとされている。（vgl. ibid. 29）ハイデガーにとって心理学と哲学の関係や世界観学は早くからの関心事だつた。この枠組みそのものがそもそもフッサールのなのである。根源学としてのフッサール現象学が意識の本質分析であり、それが意識の自然科学である心理学に對置されていることと、ハイデガーが心理学的なものを極めて特殊な存在領域の現象としていふこと（vgl. ibid. 30）とはパラレルであろう。⁽¹⁷⁾

一九一九年講義においてハイデガーは根源学について次のように語っている。「根源学とは個別の対象領域についての学ではなく、個別な対象領域のすべてに共通なものについての学であろう。つまりある特殊な存在についての学ではなく、普遍的な存在についての学のことであろう。」（ibid. 26）ここではすでに一般の次元、つまり普遍的な存在論が語られているかのように見える。しかし、一足飛びに根源学＝存在論、つまり存在論としての哲学の問題構制がこの講義で成立していると見てよいのだろうか。⁽¹⁸⁾それならば、一九二二年の独自性はまったくなくなるだろう。前述のように、根源学の理念は初期ハイデガーに一貫しているからである。ここでの根源学の理念はやはりフッサールの枠組みの中で理解されねばならない。右の引用はまさにフッサールの『イデーネン』に由来すると思われる。つまり形式的存在論と領域的存在論の関係として考えられるべきであろう。事実学と本質学の区別に従えば、形式的存在論は対象一般に関する形相的学であり、⁽¹⁹⁾これは事実学に依存しない本質学である。これは根源学と考えられよう。「形

式的存在論は同時にあらゆる可能的存在論一般の……形式を自己の内に内蔵しており、形式的存在論は質料的存在論に対して、そのすべてに共通の形式的構成を指定する。⁽²⁰⁾そして経験に基礎付けられる事実学の基礎には、形式的存在論に属する形相的な諸存在論、即ち領域的存在論がある。しかし、これは我々の言う意味での存在論としての哲学にかかわるものではない。

我々は一九二一年のアリストテレス『形而上学』導入と共に初期ハイデガー哲学の枠組みそのものが大きな変容をこうむった、即ち存在論としての哲学が成立したということを主張したい。キシールの報告によれば、ハイデガーは一九二二年夏学期が始まる前にレーヴィットに対して、今自分が生の新しい解明の途上にいることを伝えたとされている。⁽²¹⁾このことは存在論という枠組みの中で生の意味を新たに捉え返そうとしていること、即ち事実的生の解釈学の位置づけ直しをはかっていることを示していると考えることが出来る。この意味でフッサールは乗り越えられる。それ故、ハイデガーの哲学体系構成がここで大きく位置づけ直されるということを一九二一／二二年冬学期講義で確認してみよう。

IV、一九二一／二二年冬学期講義の枠組み―哲学の定式と解釈図式から―

一九二一／二二年冬学期講義は、アリストテレス解釈の準備として、事実的な生の動的分析を主な内容とし、具体的な解釈に入っていないと思われるかもしれない。しかし、これまで見てきたように完全にアリストテレス解釈を前提にしていると考えざるを得ない。

それ故、ここでまず問題にしたいことは、前述のようにアリストテレス『形而上学』の枠組みが大きく入ってきたということである。もしこの意味で存在論としての哲学が確立したとすれば、『形而上学』第四卷第一章での定式で表わされる *ὄν τὸ ὄν* への問いが関わっていると考えるのは自然であろう。即ち、「存在者を存在者として探求し、ま

たこれに自体的に属するものを探求する一つの学がある。この学はいわゆる部分的学的内のいずれとも同じではない。なぜなら、他の学のいずれも存在者を存在者として一般的に考察しないで、ただそのある部分抽出し、これについて付帯する属性を探求するだけである。」(1003a20) という有名ないわゆる存在論の定式である。これは普遍的存在論の問題を語っている。また、リチャードソン宛の書簡でハイデガーが自分の思惟の道を規定している問いであるとしている、「全ての多様な意味を統べ貫いている単一で統一的な存在の規定は何か」という問いに関わるアリストテレスの命題 τὸ ὄν λέγεται πολλαχῶς を勸案することも必要であろう。ブレンターノの書物によって存在の問いへと覚醒させられたハイデガーがこの命題を無視してアリストテレスを語るとは考えにくいからである。⁽²³⁾

この一九二一／二二年冬学期講義ではアリストテレス解釈が事実的生の解釈学が向かう「主要事象」(GA61, 110)とされているが、『形而上学』の論点は当該の講義でいかに生かされているのだろうか。この講義における哲学の定式とアリストテレスの解釈の図式的方向づけとの内にそれを読み取りたいと思う。哲学の定式は以下のとおりである。「哲学とは存在(存在意味)としての存在者への原理的に認識する関わりであり、しかもこの関わりの中でこの関わりにとって関わりを持つこととその都度の存在がともに決定的に重要であるような関わりである。」(GA61, S. 60) そして、哲学はここで初めて現象学的「存在論」として規定される。

この哲学の定式を解釈してみよう。「存在(存在意味)としての存在者への原理的に認識する関わり」とは存在者を存在として、つまり存在という観点で規定する関わりを意味しており、存在への視向における存在者の探求の構造を言い表している。存在意味に関して言えば、「関わりは連関を顧慮して捉えられ、連関の方向においてその意味へ向けて (auf seinen Sinn hin) 問いかけられる、即ち連関意味へ向けて問いかけられる。」(GA61, 53) と「考察の観点」が剔出されている。これは *ὄν* *ᾧ* *ὄν* を探求する学としてのアリストテレス存在論の課題と一致する。ハイデガーは『形而上学』第四卷第一章について後に(一九二八年夏学期講義)言っている。「*τὸ ὄν ᾧ ὄν* が探求されるべ

きである。1 存在者が存在者である限りで、即ち存在者を存在者がそれである存在者にするものへの視向においてのみ、つまり存在への視向においてのみ、存在者が探求されるべきである。」(GA26, 12)

次に「原理的に」とは全ての存在者の存在意味への志向を意味する。何故なら、「存在、存在意味は全ての存在者において哲学的に原理的なものであり、存在者としての存在者において究極的に問題になるものは存在、あるいはより規定的に言えば、そのような〈存在〉がいかに捉えられるかという仕方に関しての (im Hinblick auf die Weise) 存在 \parallel 存在意味である」(GA61, 58) と言われているように、全ての存在者の存在に関わるからである。哲学の対象は全ての存在者の存在である。

また、「認識する関わり」についてであるが、認識とは「対象を対象へとして」把握すること、把握しつつ対象を規定すること」(GA61, 54) と言われている。これは明らかにロゴスの働きを表わしている。

『形而上学』第四巻第二章で「存在者は多様に語られるがつねにある一つの原理へと向かつてである」(1003b5) と言われているが、ハイデガーの哲学の定式はまさしくこれの再定式化と考えることができる。「存在(存在意味)としての存在者への原理的に認識する関わり」はハイデガーの後の定式(一九二五年夏学期講義)で言えば、例えば「現象学的研究は存在者をその存在へ向けて解釈すること」(Interpretation des Seienden auf sein Sein hin. GA20, 423) と同じ構造であると思われる。

また、このことはこの講義のアリストテレス解釈図式とも完全に合致する。即ち「1、原理と原理的なもの問題 (ἀπ' αἰτίας)」、2、把握する規定と概念把握する分節化の問題 (λόγος)」、3、存在者と存在意味の問題 (ὄν-ούσία-κίνησις-φύσις)」(GA61, 112) とする図式である。この図式は「存在者(3)は多様に語られる(2)がつねにある一つの原理(1)へと向かつてである」というアリストテレス存在論の基本テーゼを表現していると考えられる。まず(2)はロゴス (λόγος) として、オン (ὄν) の導きの糸としての役割を果たす。そして、(3)の存在者と存在意味の問題は存在論の

問題として理解できる。上記で提示されている語群は、 $\delta\upsilon\upsilon$ の原理が $\delta\upsilon\delta\iota\alpha$ であり (Met. I, 2), $\kappa\epsilon\lambda\upsilon\sigma\iota\sigma$ の原理が $\phi\upsilon\delta\iota\kappa$ である (Phys. I, 1 vel. GA9, 247/8) と $\delta\upsilon\upsilon$ ことを意味してゐる。つまり、ハイデガーはそれぞれを存在者と存在 (存在意味) の次元に対応させているのである。そして、(2)と(3)で展開される $\delta\upsilon\upsilon$ と $\lambda\epsilon\gamma\omega\varsigma$ (λέγειν) の問題こそ存在論 (Ontologie) の中心問題を表わしているのである。そしてその根本的統一を(1)の原理の問題に見ていると解釈できる。

端的に言えば、哲学の定式とアリストテレス解釈図式から読み取れるのは、一九一九年以来語られてきた原理を問う根源学がギリシア的な意味でのアルケー論として再措定されたということである。これらの契機は『形而上学』に由来するアリストテレス存在論の課題の取り返しを明示している。

V、根源学Ⅱ存在論と生の分析の関係

しかし、ここで困難な問題が生じる。いくら存在論としての哲学がこの講義で確立したといっても、実質的には依然として生の分析がなされているからである。即ち、もっぱら生の根本カテゴリーの構造を分析していて、生の存在意味の解明といういわば特殊存在論の課題が遂行されているかのように見えるわけである。ここに根本的な誤解が生ずる根があると思われる。それ故、存在論としての根源学と生の分析との連関が改めて問われねばならない。先程の哲学の定式の後半部分を見てみよう。「しかもこの関わりの中でこの関わりにとって関わりを持つことその都度の存在がともに決定的に重要であるような関わりである。」と言われていたが、「その都度の存在」とは事実性である哲学的生である。「哲学は〈関わること〉の「様態」(GA61, 50)であり、「哲学は生そのものの一つの根本様態であり、それ故哲学は生を本来的に取り返す。・・・この取り返し自体がラディカルな探求としての生」(GA61, 80)である。従って、実際には生の存在が中心課題になる。端的に「哲学の問題構制は事実的生の存在に関わる。」(IA, 247)の

である。この講義でも先に触れたヤスパース評論と同じく「事理的生の存在意味への問いは・・・／＼私が存在するVの意味への問いとして形式的―告知的に捉えられる。」(GA61, 172)とされていた。ただ根源学と生の分析をイコールで結ぶことによつて、事実性の解釈学を単なる生の存在論のレベルに縮小してしまう危険性が生じる。生の分析は存在の一部としての生の存在だけを問題にしているわけでは決してないのである。

では何故、根源学が生分析になるのか。それは生が世界全体に関わるからではないだろうか。生は存在者と関わる。生は何か心に心を配り、心配し、氣遣いながら生きている。(GA61, 90)これは生の関わり意味＝氣遣うこととして構造化される。世界とはそれへと生が関わるころのもの(GA61, 86)である。「世界は生の中で、生に対して現に存在する。」(IA, 242)生は世界を語り、自己を語ることができる。語ること(レゲイン、ロゴス)の契機がここに生きている。ロゴスをもつ動物である人間、即ち生は「その世界を語りかけられたものという様式においてもつころの存在者」(GA63, 21)なのである。

この一九二二―二三年冬学期講義の実質的な内容の展開をなしている『アリストテレス草稿』(一九二二年)をここで援用してみよう。レゲイン(語ること)とは「対象言明において存在者をそのウーシア(存在性)の内への保存へともたらず」(IA, 253)とされている。あるいは「存在者はそのエイドスに向けて言明される」(IA, 253)とも言われている。それ故、ハイデガーの語る「関わり」(Verhalten)とはロゴスと解釈できよう。講義でも「把握する規定としての関わりは言うという仕方で、対象を語る(Besprechen)という仕方で、対象に依拠している。」(GA61, 54)とされている。ロゴスをもつ動物という人間の在り方が手引きとなつて、存在者にとつて原理的なものである存在を語る構造が「関わり」ということで示されているのである。⁽²⁵⁾ovvovについて、例えば、一九二六年夏学期講義では「ロゴスにおいて自己を示し、何かとして(als was)という仕方において出会われる」とされている。

(GA22, 155)

このことはハイデガールの主著『存在と時間』におけるのと全く同じ構造であるように思われる。即ち、現存在の存在・存在論的優位を先取りしている。つまり、現存在（人間）には存在了解が属して、即ち存在を了解するという仕方存在していて、「全ての存在者を……つねにその存在において露呈する」（GA2, 19）ということとパラレルであると考えるのである。あるいは、時期はずっと後になるが（一九三〇年夏学期講義）、「存在を了解することは存在者への全ての関わりを貫いているのみならず……存在者一般への関わりの可能性の条件である。」（GA31, 125）というテーゼが想起される。現存在の分析論が基礎的存在論になることと、この一九二二／二三年冬学期講義での生の分析が存在論としての哲学の内実をなすことは構造上は同じことであると言える。⁽²⁶⁾それ故、存在一般への問いは一九二二年にすでに視野の内に入っており、このことはこの講義における哲学の定式を $\epsilon\sigma\tau\alpha\tau\omicron\upsilon\sigma$ の学である存在論の定式、即ち $\tau\omicron\upsilon\ \delta\upsilon\ \lambda\acute{\epsilon}\gamma\epsilon\tau\alpha\iota\ \mu\omicron\lambda\lambda\acute{\alpha}\chi\omicron\upsilon\varsigma\ \pi\acute{\rho}\omicron\varsigma\ \mu\acute{\iota}\lambda\alpha\nu\ \delta\epsilon\chi\eta\tilde{\nu}$ の取り返しと捉えることによって理解可能になるのである。ただ $\mu\omicron\lambda\lambda\acute{\alpha}\chi\omicron\upsilon\varsigma$ 、「多様な仕方で」という契機は残念ながら一九二二／二三年の講義の内で見出すことはできない。しかし、この講義の実質的展開である『アリストテレス草稿』（一九二二年）の第二部では、カテゴリーとしての存在者、デユナミス・エネルゲイアとしての存在者、真なる存在者、付带的存在者という $\mu\omicron\lambda\lambda\acute{\alpha}\chi\omicron\upsilon\varsigma$ が問題となつている。つまり様々に語られる存在者が『形而上学』七、八、九巻の存在論の中心問題として取り上げられているのである。（IA, 267 ff）

結 論

さて、これまでの考察からして、従来のように初期ハイデガー哲学をいわゆる「事実性の解釈学」のレベルでのみ捉えることはもはやできない。そのように解釈すれば、 $\epsilon\sigma\tau\alpha\tau\omicron\upsilon\sigma$ への問い、即ち存在論一般の問題がすり抜けてしまふ。あるいは「生の解釈学の学的基礎付けから存在論へ」というような安易な図式に当てはめることもできない。事

実的生の解釈学の内実が、つまり生の存在意味への問いの内実が変わるといふことこそが問題なのである。それは、両者が同居した一九二三年夏学期講義『事実性の解釈学（存在論）』という題目からも明らかである。さらにはアリストテレスのキネーシス概念だけでもつばら注目して、それを事実的生の動性と重ね合わせることもできない。これでは生をその存在構造に即して説明するレベルにとどまり、存在一般への問いは生じえない。そもそもキネーシスは存在者のレベルの問題であり（存在的）、ハイデガーが「生の事実性の問題（存在論的）をキネーシス問題とした」〔括弧の中は筆者補足〕などとは言えないと思われる。これではハイデガーの存在論を人間存在論のレベルに落とすに落してしまふ。むしろ、事実的生の動性にこそ原始キリスト教の契機を見るべきであろう。

一九二一年における存在論化と共に、同じチームを使つていてもその内実は変化しているのである。我々は初期ハイデガー哲学における原始キリスト教に由来する生経験の歴史性や遂行の優位などの論点の重要性をなおざりにしているわけでは決してない。しかし、ガダマーやベゲラーに顕著なように、ハイデガーのアリストテレス受容の背後にそれをあまりに強く見ることに異を唱えているのである。⁽²⁸⁾この立場ではアリストテレスは否定的受容によつて根底から問い直される解体的対決の対象として捉えられる。ここでは事実性の解釈学のレベルにとどまらざるをえない。そしてガダマーのように、初期フライブルクではなく、マールブルク時代において初めて『形而上学』との対決が展開されるなどということには肯定的になれない。⁽²⁹⁾また、キシールのように、積極的にハイデガーのアリストテレスの受容を認めるが、それは『ニコマコス倫理学』（特に第六巻）中心で基本的には事実性の存在論のレベル、あるいは人間存在論のレベルにとどまっている解釈も到底受け入れられない。⁽³⁰⁾キシールは一九二一年―二四年を人間学という道によるアリストテレスのウーシア的存在論の解体の時期と位置づけている。この様な立場ではアリストテレス導入の意味がなく、一九一九年から二九年まで本質的な変化なしという見解も生まれる土壌をも作つてしまふ。⁽³¹⁾あくまで事実性の解釈学、根源学、生の分析といったものは、アリストテレス『形而上学』の導入によつてその位置づけが全体

として変わったのである。

確かに、ハイデガー哲学の事実的な出発点である一九一九年戦争緊急学期から原理的な次元の探求への志向は基本的にはすでにあった。(根源学としての哲学の理念)しかし、それが一九二一年に大きく開花したと考えねばならない。即ち、根源学はアリストテレスの導入によって存在論としての哲学へと強化されたのである。しかも、それは『形而上学』の取り返しとしてなのである。ただ、何故アリストテレスが一九二一年に突然導入される必然性があったかは別に問われるべき課題として残る。とはいえ、アリストテレス『形而上学』の導入こそが一九二一年をハイデガー哲学のターニングポイントとし、存在論の地平を開いたことだけは確実である。

最後に冒頭に引用したヤスバース宛書簡に戻ろう。「古い存在論(及びそれから生じたカテゴリー構造)は根本から新たに形成し直さなければなりません。」このことが意味しているのは、生という存在意味の新たな解明を従来ギリシア存在論の批判的摂取の上に獲得することなのである。

註

本稿では、以下の略号を用いる。

- GA2 Sein und Zeit (1977)
- GA9 Wegmarken (1976)
- GA20 Prolegomena zur Geschichte des Zeitbegriffs (1979)
- GA22 Die Grundbegriffe der antiken Philosophie (1993)
- GA26 Metaphysische Anfangsgründe der Logik (1990)
- GA31 Vom Wesen der Menschlichen Freiheit (1994)
- GA56/57 Zur Bestimmung der Philosophie (1987)
- GA58 Grundprobleme der Phänomenologie (1993)

- GA59 Phänomenologie der Anschauung und des Ausdrucks (1993)
- GA61 Phänomenologische Interpretationen zu Aristoteles (1985)
- GA63 Ontologie (Hermeneutik der Faktizität) (1988)
- (GA 15 Martin Heidegger Gesamtausgabe 6 卷) の終結した終結の心(心)
- 1A Phänomenologische Interpretationen zu Aristoteles (Anzeige der hermeneutischen Situation), in: Dilthey Jahrbuch für Philosophie und Geisteswissenschaft Bd. 6 (1989)
- (1) 本稿は日本會社全集第四十五回大会(於日本女工大)での口頭発表に基づくものである。
- (2) Th. Kisiel, Das Entstehen des Begriffsfeldes > Faktizität < im frühwerk Heideggers, in: Dilthey Jahrbuch für Philosophie und Geisteswissenschaft Bd. 4 (1986-7) S. 114
- (3) Th. Kisiel, The Missing Link in the Early Heidegger, in: Hermeneutic Phenomenology Lectures and Essays (1988) p. 21
- (4) C.F. Gethmann, Philosophie als Vollzug und als Begriff: Heideggers Identitätsphilosophie des Lebens in der Vorlesung vom Wintersemester 1921/22 und ihr Verhältnis zu > Sein und Zeit <, in: Dilthey Jahrbuch für Philosophie und Geisteswissenschaft Bd. 4 (1986-7) S. 36
- (5) Martin Heidegger/Karl Jaspers Briefwechsel 1920-1963 (1990) S. 27
- (6) K. Löwith, Der europäische Nihilismus Betrachtungen zur geistigen Vorgeschichte des europäischen Krieges, in: Samtliche Schriften 2 (1983) S. 518
- (7) Martin Heidegger/Karl Jaspers Briefwechsel 1920-1963 (1990) S. 20
- (8) ibid. S. 21 (終結精神)
- (9) Vgl. Th. Kisiel The Missing Link in the Early Heidegger, in: Hermeneutic Phenomenology Lectures and Essays (1988) p. 8
- (10) Vgl. Th. Kisiel, The Genesis of Heidegger's Being and Time (1993) p. 462ff.
- (11) Th. Kisiel, The Genesis of Heidegger's Being and Time (1993) p. 230f.
- (12) M. Kusch, Langage as Calculus vs Langauge as Universal Medium (1989) p. 167
- (13) E. Tugendhat, Der Wahrheitsbegriff bei Husserl und Heidegger (1970) S. 265
- (14) 拙稿「『存在と時間』の「存在」について」(知外哲學雑誌第十一号) 一一一―一二三頁を参照。

- Vgl. O. Pöggeler, Der Denkweg Martin Heideggers (1990) S. 36ff.
- (15) O. Pöggeler, op. cit., S. 70
- (16) E. Husserl, Philosophie als strenge Wissenschaft, in: Husserliana Bd. XXV (1987) S. 61
- (17) 『ロコス』論文の評価について、例としてGA20, 126, 133f., 159, 164f. 参照。
- (18) 根源学と存在論の関係については、細川亮一「存在論と超越論哲学」(哲学年報第五十三輯) 八二頁参照。
- (19) E. Husserl, Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie (1980) S. 22
- (20) Vgl. M. Heidegger, Zur Sache des Denkens (1969) S. 84 「(純粹現象学) は、それによって刻印された哲学の〈根本学〉である。」
- (21) E. Husserl, op. cit., S. 22
- (22) Th. Kiesel, The Genesis of Heidegger's Being and Time (1993) p. 230
- (23) W.J. Richardson, Heidegger's Vorwort, in: Heidegger Through Phenomenology to Thought (1967) S. XI
- (24) M. Heidegger, Zur Sache des Denkens (1969) S. 81
- (25) 『アリストテレス草稿』には「原理的存在論」(IA, 246f.) とその表現が見られる。
- (26) ロコスをもつ人間(生)が存在を把握するから、生自身を分析するのである。ロコスをもつ動物としての人間に関しては、GA2, 65, GA63, 21, 107など参照。「生と現存在、ロコスと動物」(GA22, 188)
- (27) もはやこの講義を『存在と時間』と同じであると言いつづけるのではない。この講義は、いわゆる「三つの洞察」以前になされたおり、時間への問いの不在など、またそれへの途上にあることは言うまでもない。むしろ「現象学的存在論」といっても同じではない。存在(事本性)へ向けて生を解釈するのと、時間性へ向けて現存在を解釈するのと、この差異がある。
- (28) Th. Kiesel, Das Entstehen des Begriffsfeldes > Faktizität < im frühwerk Heideggers, in: Dilthey Jahrbuch für Philosophie und Geisteswissenschaft Bd. 4 (1986-7) S. 114 この文章は『三つ冊』参照。
- (29) Vgl. H.-G. Gadamer, Heideggers Wege (1983) S. 145
- (30) Vgl. H.-G. Gadamer, Erinnerung an Heideggers Anfänge, in: Dilthey Jahrbuch für Philosophie und Geisteswissenschaft Bd. 4 (1986-7) S. 20
- (31) Vgl. Th. Kiesel, Das Entstehen des Begriffsfeldes > Faktizität < im frühwerk Heideggers, in: Dilthey Jahrbuch für Philosophie und Geisteswissenschaft Bd. 4 (1986-7) S. 119
- キニールは『存在と時間』の構想は一九二二―二四年にアリストテレスの特に『ニコマコス倫理学』の解釈を背景に形作られてき

たごころるべ。 Vgl. Th. Kiesel, *The Genesis of Heidegger's Being and Time* (1993) p. 9

『存在と時間』の構想や『ニコマコス倫理学』中心に見る解釈については次のものを参照。

F. Volpi, *Heidegger in Marburg: Die Auseinandersetzung mit Aristoteles*, in: *Philosophischer Literaturanzeiger* Bd. 37 (1984)

F. Volpi, *Being and Time: A "Translation" of the Nicomachean Ethics?*, in: *Reading Heidegger from the start* (1994)

J. Taminaux, *Poiesis and Praxis in Fundamental Ontology*, in: *Research in Phenomenology* 17 (1987)

(2) Vgl. Th. Kiesel, op. cit. S. 119